

ムラブリの智の伝承—森林資源活用について

Mlabri's wisdom tradition-utilization of forest resources

才田 春夫、伊藤雄馬
SAIDA Haruo, ITO Yuma

ムラブリが森での遊動狩猟採集生活から村での定住生活に移行してから四半世紀、果たして森の民だった彼らが森で学び、森で育んだ生活の知恵、森の恵みを活用する知恵や技が、村生まれ村育ちの「村世代ムラブリ」に受け継がれているのだろうか。定住、農作業生活に転向したムラブリにとって森とは何か、定住ムラブリと森との関係を明らかにするために、身近な森林における有用資源とその利用法の理解度について聞き取り調査を行った。その結果、ムラブリがほぼ1世紀に渡って蓄積し継承してきた森の知恵が、森生まれ森育ちの森世代から、村世代に伝えられていることが示唆された。

キーワード： ムラブリ、森の知恵、森林資源の活用、森世代、村世代

1. はじめに

かつてムラブリは森の民だった。そのムラブリの起源は明らかではないが、19世紀末から20世紀初頭にラオスの Sayabouri からナーン県に入ってきたことが複数報告されている^{1)~4)}。それから100年前後、彼らは森での遊動狩猟採集生活を行ってきた。森の中を5~10日間隔で移動し、他部族との接触は必要最小限としていた。宿泊小屋を覆った葉が黄色くなる頃には移動してしまい、ムラブリの姿を見かけることが少ないため、黄色い葉の精霊「ピートニルアン」と呼ばれていた。人目を避けていたムラブリだけに、森の恵みに支えられた彼らの生活に関する研究は少ない。彼が何を食べ、何をどのように利用してきたのか。タイの民族学者プーカジョンの1982年の調査で、ムラブリが利用している森の資源について整理している。その当時のムラブリはまだ狩猟採集の生活をしており、農作物栽培も家畜飼育も行っていなかったが、既に meo 族の農作業に雇われることを報告している⁵⁾。2014年に大澤らは食資源について報告している⁶⁾。

森での遊動狩猟採集も1980年代にはタイ政府の方針によって終焉を迎える。現在では、北部タイのナーン県とプレー県、5カ所の村に約400名のムラブリが分かれて住んでいる。本研究の調査対象であるファイ・ユアック村のムラブリは33世帯185名と、最も大きなコミュニティーである⁷⁾。居住区が隣接するモン族等の畑作業に雇われ生計を維持している。農繁期は早朝から夕方暗くなるまで働き、何日も畑に泊まり込むことも珍しくない。労働者として雇われるだけでなく、自らの畑を所有する者もおり、彼らの生活はこの数十年で大きく変化している。

しかし、彼らが約 1 世紀に渡って生き延びることが出来たのは、代々森で培った生活の知恵や技を受け継いできたからだと思われる。本研究では、ムラブリの森の知恵（ムラブリ文化）を整理し、狩猟採集から村での定住生活に移った彼らが、ムラブリ文化を継承しているかに焦点を当て、調査を行うこととした。

2. 調査対象と調査方法

2.1 Huai yuak 村のムラブリ

ムラブリは現在、ナーン県のファイ・ユアック村、ファイ・ルー村、プー・ファー開発センターの 3 カ所、隣接するプレー県のタ・ワ村とファイ・ホム村の 2 カ所定住している。今回調査対象としたのはファイ・ユアック村のムラブリである。彼らは 1980 年代半ばに政府から与えたこの地で定住を始めた。ファイ・ユアック村は標高 600m の山間地にあるが、付近の山林は切り開かれ、急斜面の農地が広がっている（図 1. 左：Huai Yuak 村周辺衛星写真。Google map より作成）。農地の多くはモン族が所有して主にトウモロコシ栽培を行っている。ムラブリは賃金労働者としてモン族に雇われ、主に畑作業の収入で生計を立てている。農作業は連日、早朝から長時間続く。畑の農作業小屋に何日も泊まり込むことも少なくない。農作業に忙しいムラブリだが、休日や農閑期に森へ出かけ、食材、薪、バッグの材料採集など、森に依存した生活を維持している。

2.2 森林資源調査

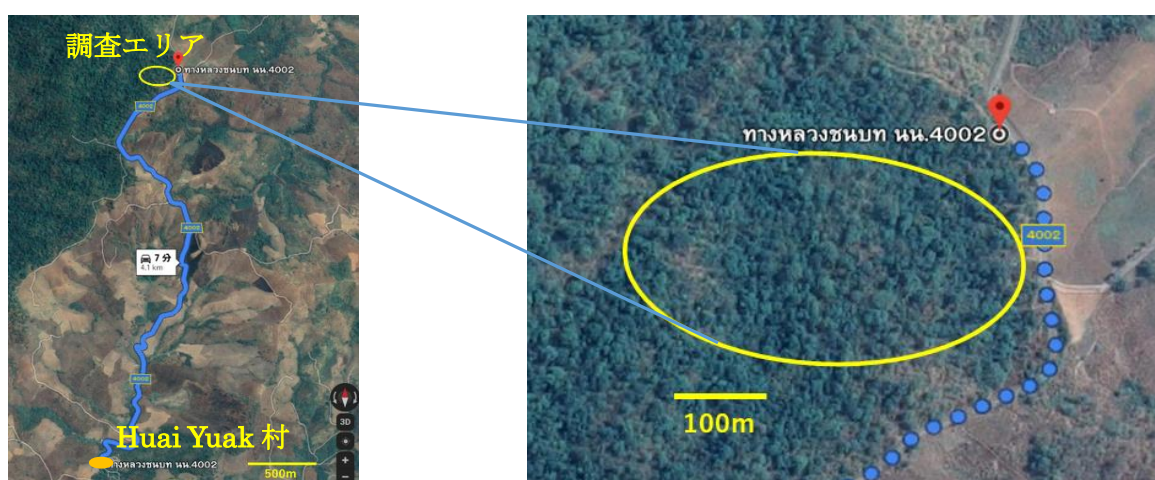


図 1. ファイユアック村と森林調査エリアの位置関係（Google map より作成）

ファイ・ユアック村のムラブリが利用している森林資源についての調査を 2018 年 1 月に行った。村一番の知識人グループのうち、ロン氏とチャロンチャイ氏の 2 名の案内で行った。調査地はファイ・ユアック村から北に 4 km に位置する森林の一角、外周約 1 km における有用植物（食糧、医療、道具の材料）の撮影とムラブリ語名称の記録を行った。

2.3 森林資源知見に関する聞き取り調査

調査対象：10 代～60 代の男女 30 名

調査期間：2019 年 8 月

調査目的：「森の知恵」が村で生まれた育った世代に受け継がれているか。

調査方法：

- (1) 森の知恵・有用植物名調査：2018年1月の森林資源調査で特定、撮影した有用植物33種の内、画像の見やすい17種の写真又は動画を不アイ・ユアック村住民のムラブリに見せ、植物名と活用について個人毎に聞き取りを行った(図2)。植物名が合っているものを正解とし、世代間で正解率に違いがあるかを調べた。若い世代の正解率が高ければ、森の知恵が受け継がれているという前提に立った調査である。
- (2) 生活背景調査：聞き取り調査では、各個人の生活や教育、森との関わりなどについての聞き取りも行った。



図2. 森の知恵調査・有用植物とムラブリ語名

3. 調査結果

3.1 森林調査結果：

植物31種類、魚介類2種類のムラブリ語名を特定した。それぞれをムラブリの利用法に従って食料、薬、材料の3つに分類した。その結果、食料16種、薬草7種、材料として用いるものが18種類だった。幹線道路に近いエリアでも有用資源が豊富にあることが明らかになった。

3.2 森の知恵・有用植物名調査結果：

男女29名の世代及び男女別平均正解率を表1に示した。調査対象人数は少ないが、若い世代ほど正解率が高いという結果となった。このことから個人間に知識差はあるものの、森の知恵は村

世代に受け継がれていると言える。「村世代」とは、村生まれの村育ち又は、森生まれ村育ちと定義することとした。森での知識の集積をテーマにしていることから、森での生活が幼児期(満6歳未満)のみの場合も村世代とした。これに対して多感な少年期を森で育った年代を「森世代」と定義した。この考え方に当てはめると、今回調査

表1. 植物名正解率

世代	世代&男女別正解 (%)		人数 (人)				
	年齢	男	女		男	女	合計
村世代	10代	80	50		3	2	5
	20代	78	76		6	5	11
	平均	79	63	小計	9	7	16
	30代	76	—		2	0	2
	40代	32	56		2	4	6
森世代	50代	21	—		2	0	2
	60代	14	—		3	0	3
	平均	36	56	小計	9	5	13
				合計	18	11	29

対象となった20代11人の内6人が森生まれだが、そのうち5人が6歳以前に村に移っていた。従って、20代までを「村世代」、30代以上を「森世代」と位置づけた。今回の調査では予想に反して村世代の方が森世代よりも正解率が高いという結果がでた。森の知恵や経験を集積している森世代だが、40代以上の正解率が著しく低い結果となった。

有用植物17種を食料、薬、材料の3つの用途に分類し、用途別正解率から知識特性の検討を行った(表2)。村世代では、食料と道具などの材料に対する知識は男子の方が高い。薬草に対する知識は男女とも高い。森世代も薬草に対する知識は他の用途よりも高く、必要性が認知度を高めると推察される。

表2. 用途別植物名正解率

世代	年齢	食料		薬		材料	
		男 (%)	女 (%)	男 (%)	女 (%)	男 (%)	女 (%)
村世代	10代	76	45	89	83	89	58
	20代	74	75	89	100	89	77
	平均	75	60	89	92	89	68
森世代	30代	68	—	100	—	92	—
	40代	27	55	50	75	42	63
	50代	18	—	17	—	25	—
	60代	15	—	22	—	22	—
	平均	32	55	47	75	45	63

4. 考察

森の有用資源に関して主に植物名とその利用方法について調査を進めた。ムラブりが利用している植物31種類を確認したが、専門家による同定には至っていない。これらの植物の利用法は食用、薬用、モノの材料など用途も多様である。今後、機能面、特に薬効があるとされている植物

の同定と科学的証明を求められる。Trierによると、1982には既に、薬をモン族からもらえるため薬用植物に対する関心が薄れている⁴⁾。ムラブリの森の知恵を後世に正しく伝えるためにも、有用資源の機能確認と整理をする必要がある。

ムラブリの森の知恵が若い世代に継承されているかについて焦点を当てて調査を行った。その結果、継承されていることが示唆された一方で、森世代の正解率が著しく低い結果となった。ムラブリの行動様式から考えると、これは森世代の知識不足を意味するものではなく、調査方法に問題があったと考えるべきであろう。ノートパソコン画面に映し出した写真や動画から植物名を言ってもらった方法を取ったが、森世代にとっては適切な方法ではなかった可能性がある。その要因として以下のようなことが考えられる。①PC 画像は見る角度や明るさなどによって画像が見えにくかった可能性。②40代以上は遠視で画像が見えにくかった可能性。③教育を背景とした画像認識に対する世代間の違い。④画像だけでは判断できず、実物を見たり現場を見たりすることで判断できた可能性。⑤高齢者にとってはインタビューが長すぎた。特に60代は途中放棄するケースも見られた。このように調査方法に関して負の要因が少なく、その影響について検証する必要がある。

森の知恵が如何にして継承されてきたか、今後も継承されるかを知ることが調査のもう一つの目的だった。森の資源について、29名の殆どが家族らに教えてもらったと答えた。自分で学んだと答えたものも数名いたが、彼らも年長者と行動を共にすることによって知識や経験を学んできた。村世代にも森世代にも共通しているのは、自分の子供に森の知恵を伝えたいと思っていることである。村世代に森の知恵が継承されているだけでなく、それを次の世代に受け継ぎたいという意識も継承されていることが確認できた。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 16J00729 の助成を受けた研究の一環として行われました。調査にご協力頂いたムラブリのLon氏、Charonchai氏、ファイ・ユアック村の皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) Bernatzik (1951) *The Spirit of the Yellow Leaves*, London, Robert Hale Ltd.
- 2) Young, O. Gordon (1961) *The Hill Tribes of Northern Thailand: A Socio-Ethnological Report*, Bangkok, Thai-American Audiovisual Service.
- 3) Boeles, J. J. (1963). "Second Expedition to the Mrabri [sic] of North Thailand ('Khon Pa')", *The Journal of the Siam Society* 51(2):133-160.
- 4) Jesper Trier (2008) *The Khon Pa of Northern Thailand: An Enigma*
- 5) Surin Pookajorn (1985) *Ethnoarchaeology with the Phi Tong Luang (Mlabrai) World Archaeology*, Vol. 17, No. 2, *Ethnoarchaeology* pp. 206-221
- 6) Seiji Ohsawa¹, Shu Nimonjiya², and Atsuko Shimoda¹ (2014) *Field notes on the dietary habits of the Mlabri hunter-gatherers in Thailand*
- 7) Nimonjiya Shu (2015) *From Interacting to Accessing: On Relationship* Nimonjiya 138-168